

とあるリヨリヨの奇妙な冒険ーシーズン痛ー

リヨウ大佐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リヨナサンリヨースター行方不明となって三年…

リヨナサンリヨースターに助けられた名もなき小さき子供

この物語はその小さき子供が二代目のリヨリヨとなり

奇妙な日常を送る物語であるっ

目次

こんな寺子屋生活は間違っている

1

駆け抜ける思い

12

カリスマ組設立！

17

謎の人物

22

異変

26

黒騎士

30

修行の日々

35

仮面の中に宿る者

41

涙、空に落ちて

45

覚醒そして…

49

もう1人のリヨリヨ

54

絶望を越えて

62

愛

67

冒険の終わり

73

こんな寺子屋生活は間違っている

とあるリヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

第1話 こんな寺子屋生活は間違っている

そして、なんやかんでもう寺子屋生活が始まる日だった

リヨリヨ「うーん：昨日はよく寝れなかったな」

早苗「ふあ：おっ！リヨリヨくん早いですねー今日から寺子屋生活ですものね頑張つて下さいね！」

リヨリヨ「はい！頑張つて行きます！」

流星「ふああ：リヨリヨくん早いでふねえ：ふわわ：」

リヨリヨ「流星兄様おはようございます！」

流星「おはようございます！さっ、ご飯食べに行きましょう」

リヨリヨ「はい！」

そして、いつもように諏訪子様と神奈子様が座っていた

リヨリヨ&流星「おはようございます」

神奈子「おはよう！おつリヨリヨ早いなあ！流星もつられて起きたか？」

流星「はい…」

諏訪子「ふふつ…たまにはいいんだよ？リヨリヨ今日は頑張ってくるのよ？さもないと、縛り付けカエルの餌にスルゾ！」

リヨリヨ「ひいつ!?!ご、ごめんなさい！」

諏訪子「冗談だよ冗談さつご飯食べて早く行きなさい？」

リヨリヨ「分かつてますよ！パクパク…」

諏訪子「ふふつ…」

(数分後)

リヨリヨ「ご馳走様でした！では行ってきます！」

諏訪子「いつてらっしやい！ちゃんと書くもの持った？」

リヨリヨ「持ってますよ！」

神奈子「道分かるか？」

リヨリヨ「分かりますよ？」

早苗「お弁当持ちましたか？」

リヨリヨ「持ちました…」

流星「お米食べる！」

リヨリヨ「意味分かんないです！もう！行つてきます！」

そして、僕は寺子屋に向かつて歩き始めた

道は覚えていたので迷う事はなかった

途中で、青い髪の毛の女の子がジーと見てきたりしたけど…

今もなんだけどね

リヨリヨ「…」

チルノ「ジー」

リヨリヨ「な、何？」

チルノ「いいえなんでもないけど？」

リヨリヨ「そ、そう…」

大ちゃん「コラ！チルノちゃん！困ってるじゃないやめてあげなさい！」

チルノ「だって〜！あたいと同じ道通るんだよ？しかも男か分かんないし？」

どう見ても男だと思っただけ…

大ちゃん「ごめんね、チルノちゃんちよつと馬…はっ?!」

チルノ「大ちゃん！馬鹿っていうな！馬鹿っていう方が馬鹿なんだぞ！」

大ちゃん「うう…ごめんなさい…」

なんだか分かんないな…と思いつつも寺子屋に着いたあのチルノとかいう子も寺子

屋の中に入って行った

本当に大丈夫かな…？

そして、担任の先生の名前は聞いていたのでたしか…めいりん先生？だったはず

めいりん「おっ君がリヨリヨくんか…」

リヨリヨ「はい！クラスは…？」

めいりん「可愛い…」

リヨリヨ「え？」

めいりん「いやなんでもない！リヨリヨくんこっちだ」

そう言われて行ったクラスが…だった

めいりん「よーしみんな席につけー今日は転校生を紹介するぞ！さ、リヨリヨくん入ってきて、自己紹介してくれる？」

リヨリヨ「はい！転校してきた洩矢リヨリヨですよろしくお願いします！」

するとみんながわーと笑っていた

しかもみんな女の子

クラスも1組しかなく6年間このクラス子達の仲良くやっついていけるだろうか…

リヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

第3話 シスターズ

新登場人物

Ririha||Sole (リリハ||ソル)

能力 侵入する程度の能力

パラレルワールドからやって来たもう一人のキリハ

侵入する能力で別の（キリハがいる）世界にやってきた。相当な暇人であり現実主義者。キリハの姉、妹のような存在でもあり、頼れるパートナーでもありいいコンビ。

リヨリヨとの関係

キリハとは全く面識なし。何もデータがないからキリハは誰なのか知らない。

リリハもまた自分のもうひとつの世界の自分とわからない。

何かの拍子だろうか。侵入した世界から一冊の本を見つける。その本に幻想郷という地があるというのを読んだ。それはこの世にあつて無いもの。彼女は興味を抱いた。彼女は常に暇人であり忙しい身でもある。空間移動の法律。当時彼女の世界では歪んだ時空間移動が禁止されていた。彼女の世界は複数の世界の内、不安定な要素が多い。SF、ファンタジーと呼ぶべきなのか、混ざりすぎている。しかし彼女の世界ではそれが当たり前である。

そんな中不安定な要素について悪事を働くものが現れた。別の世界への干渉である。

別の世界で起こったことは他の世界にも影響がでる。例えばある人が亡くなれば他の世界でもその人と対応している人も亡くなる。とても危険である。それにより空間移動の法律が制定された。当然彼女の能力はそれを破れるものだ。故に常に追われる。

さて、そんな中ようやく見つけた幻想郷で彼女は何に出会うのか？過去に失われた文明か？それとも人か…

性格

落ち着いている。キリハほど元気な性格ではない。現実的で「どうして魔方陣をわざわざ光らせるんだ？エネルギーの無駄だと思っただが。」が彼女の中での名言。

SS双子

S i s t a || N o t e (シスタ||ノート) 妹

能力 解放する程度の能力

姉が好きだ。でも助けて欲しいときもあるけど頼りたくない。それでも私は姉が好きだ。

だから解放してあげた。人間の鎖から。

S e a p e || N o t e (シープ||ノート) 姉

能力 封じ込める程度の能力

妹が好きだ。もつと一緒にいたいし助けてあげたい。愛くるしいほど妹が好きだ。

だから抑制しないといけない。人間の鎖に。

ここに来た理由

リリハに連れられた。しかし彼女とは別の世界であっている。(リリハの世界でも幻想郷がある世界でもない、遠い遠いあり得るかもしれない世界)

こうして、僕の寺子屋生活が始まった

席に着こうとした：僕は瞬時に雷で打たれたような衝撃が走った、見てみると：

リヨリヨ「お、おかあさん?!」

諏訪子「そんな大声だしてどうしたの? うふふ」

リヨリヨ「どうしたもなにも…」

めいりん「ごほん!! リヨリヨくん!」

リヨリヨ「あ、すみません…」

僕は何がどうなっているのか分からなかった：なんで、お母さんが：

く一方諏訪子様はというと

「うふふ…驚いてるわねリヨリヨ、可愛い」と

思っているのであった

僕の隣はチルノとかいう：子の隣だった

リヨリヨ「よろしくね、チルノちゃん」

チルノ「よろし…あつ?!よく見たらさっきのストーカーじゃない!」

リヨリヨ「僕そんなつもりもないよ!」

チルノ「嘘つけ!」

大ちゃん「まあまあチルノちゃん…」

チルノ「ああ最悪う…」

大ちゃん「うーん…」

僕も少し悲しかったといえれば悲しかった…

チルノちゃんとは仲良くしたかったのに…

めいりん「さー授業始めるよー最初は…

」

そして、授業はたんたんに進んだ

今日は国語、算数、生活、生活だった

数学の時はなんでか知らないけどチルノちゃんが大苦戦していた

なので、 4×3 が29とかになっちやうだろう…そして、チルノちゃんとは関係を

作れないまま下校の時間がきた

リヨリヨ「ふう…」

??? 「リヨリヨちゃん一緒にかえろーなのだー」

リヨリヨ 「き、君は?…」

ルーミア 「ルーミアなのだーよろしくなのだー」

リヨリヨ 「よろしくね!ルーミアちゃん

でもなんでちゃん付けるの?僕男だよ?」

ルーミア 「え?!そーなの?!」

リヨリヨ 「う、うん」

なんでわかんなかったんだろ…

ルーミア 「そ、そーなのか…」

リヨリヨ 「ま、いいけどね!一緒に帰ろうよルーミアちゃん」

ルーミア 「なのだー!」

そして、途中まで一緒に帰った

ふー今日も疲れたなーと思っていると…

ドン!

??? 「いてて…はっ?!ごめんなさい!ごめんなさい!」

リヨリヨ 「大丈夫だよ、立てるかな?」

手を差し伸べる

??? 「はっ、あり#*☆♫?!」

何言ってるか全然わかんない…

??? 「おーい！シスタ！シスタ！どこのお…あつ！いたいた！あなた！何してくれるのよ！」

リヨリヨ 「チョット待つて！僕はこの子がぶつかってきて…助けただけです！」

シスタ 「そうだよ！おねえちゃん！」

??? 「そうだったの…ごめんなさいね。」

リヨリヨ 「あなたは？」

シープ 「あ、私はシープ・ノートこの子が…あれ？」

シープの背中に隠れて小声で

シスタ 「…シスタ…ノートです…」

シープ 「ごめんなさいね…この子恥ずかしがり屋で…」

リヨリヨ 「そうなんですか…大丈夫？シープちゃん？」

シープ 「だ、大丈夫で、です…」

シスタさんの背中に隠れこむ

シスタ 「もう…じゃあ私達はこれでごめんなさいね、またね！」

そう言って帰っていった

不思議な感じだった…

ふと、後ろを見ると諏訪子様がこちらに向かっていた

諏訪子「おーい一緒に帰るわよーリヨリヨー」

リヨリヨ「おかあさん…まったく…分かりましたー」

今日も疲れたな…チルノちゃんと…仲良くしたい…な…。

ー魔法の森付近ー

???「見つけたわ…もう一人の…私」

彼女は探していた…わざわざパラレルワールドから…その目的は…

ー次回予告、駆け抜ける思い

さーて次回もサービス、サービス！ー

駆け抜ける思い

リヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

第2話 駆け抜ける思い

―魔法店のある魔法店―

魔法店 「なーキリハ？」

キリハ 「なんですか？魔法店さん」

魔法店 「お前と会ってもう3年なんだな…」

キリハ 「そうですね…」

魔法店 「あん時はいきなり来てびっくりしたよ」

キリハ 「すいません…」

魔法店 「まあそう落ち込むなって、お前が来て私も…その…なんだ…」

キリハ 「…？」

魔法店 「元気になれたっていうか…なんと…と、ともかく楽しい毎日だったよ」

キリハ 「魔法店さん…」

魔理沙 「ごほん、ごほん…ええつとだなキリハ！よく聞け！実はだな…」
キリハ 「どうされました？」

こんなの簡単に言えるはずなのに！なんて言えねえんだ！恋愛絡みの事じゃない…
ともいれないけどっ！

魔理沙 「お前のことが…す、す…」

キリハ 「す？」

魔理沙 「すぎだっ！」

キリハ 「へっ?! / / な、な…」

魔理沙 「ちよつとこっついむけ！」

キリハ 「ま、魔理沙さん？ち、近い！ちかいでふうよう！」

キリハ 「ま、魔理沙…さ、さ…」

??? 「その気になってた、お前はお笑いだっただぜ？ふふふ…」

魔理沙 「んっ?!だ、誰なんだぜっ！勝手人の家入ってくんのだぜっ！」

リリハ 「私はリリハⅡソル未来から来た…」

ドン！鈍い爆発音が聞こえた

キリハ 「よくも…よくも…いいところだったのにつ！あなたは私を怒らせた！」

リリハ 「ちよつ…おまつ…やめ…ギヤアアア！」

閃光弾に似たような気功砲のようなものがリリハを吹き飛ばした…

そんな最中

リヨリヨはというと…

ー寺子屋 昼休みー

ルーミア「リヨリヨー一緒にご飯食べようなのだー友達も呼んで来たのだー」

リヨリヨ「友達？」

リグル「始めまして！リグルだよよろしくね！一緒に食べよっか」

リヨリヨ「うん！実は…僕にも友達というか…」

諏訪子「うふふ…ルーミアちゃん、リグルちゃんリヨリヨをよろしくね」

ルーミア「こちらこそなのだー」

リグル「こちらこそ！」

そして、友達はまあ出来て良かったんだけど…チルノちゃんがなんだか…

くー方チルノは…

ああなんで私なんでこんな強がつてるだろう！私の馬鹿ーっ！馬鹿じゃない！

どうしよう…

大ちゃん「どうしたの？チルノちゃん？さつきからリヨリヨの方見て…」

チルノ「べ、別に見てないもん…！」

大ちゃん「はあ…本当は仲良くしたいって思ってるんじゃないの？」

チルノ「私は…そんな…」

大ちゃん「もう！強がってないで正直になつてよ！」

チルノ「大ちゃん…そうだね…大ちゃんの言う通りだよ…分かった今日放課後声かけてみるね…」

大ちゃん「うん！」

それでこそ私のチルノちゃんだよ…

ーそして、放課後ー

僕はいつものように帰ろうとした

今日はルーミアちゃんとリグルちゃんはなんか用事があるみたいですぐ帰っちゃったけど…お母さんもなんだか知らないけど先に帰っちゃったな

一人で帰ろうと思つたその時…

チルノ「ね、ねえ…」

リヨリヨ「ん…？」

チルノ「いつ、一緒に帰ろう？」

リヨリヨ「え？い、いいけど…」

おもいがけなかった、チルノちゃんが

チルノ「やった！さっ、帰ろ」

リヨリヨ「うえ?!あ、うん…おつとと!」

チルノ「早く早く!」

手を引つ張つてくる…その手は溶けてるじやないかと思うほど汗がでていた

チルノ「じ、実はね…私あなたの事嫌いじゃないの…」

リヨリヨ「え?」

チルノ「その…強がってたの…あなたとどうして喋ったらいいのか分かんなくて…

どつちかかっていうと…好き…だよ」

リヨリヨ「んっ?!…ち、チルノちゃん?」

チルノ「チルノ…チルノって呼んで…学校以外は…ねっ?だめ…?」

リヨリヨ「わ、分かったよ…チルノ」

チルノ「ありがとう…リヨリヨ…」

手にしがみついてくるチルノ…すごく顔が赤い

恥ずかしくて倒れそうだけど…今日はずっとこのままでいたいと少し思った…

その日の幻想郷の夕日はなんだかとも明るく僕には見えた…

―次回予告 次回!カリスマ組設立!さーてこの次もサービスしちゃうわよん!―

カリスマ組設立！

リヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

第3話 カリスマ組設立！

僕は今日も変わらな～い～1日を過ごすのかと思えた

でも今日は違った：お母さんが何か変

ー朝、守矢神社ー

諏訪子「ねえリヨリヨ、あなたチルノちゃんどうゆう関係なの？」

リヨリヨ「っ?!」

早苗「えっ?!まさか！もう、彼女ちゃんできたんですか！」

神奈子「ヒューヒューやるう！（だから諏訪子不機嫌なのか）」

流星「遂にリヨリヨも彼女が出来たのですか：流石ですねえ…」

リヨリヨ「わっ?!ちよつと違います！そんな関係じゃ…」

諏訪子「あら？隠、し、事？」

一気に諏訪子様が怖く思えた

リヨリヨ「…彼女みたいな感じですよ。」

諏訪子「ふーん…なら私はチルノちゃんに負けたのか…」

リヨリヨ「そんな事ないですよ！むしろ大好きですよ！」

諏訪子「うふふ…もう…リヨリヨたら…」

神奈子「言つて欲しかったただけなんじゃ…」

諏訪子「うるさいよ！神奈子！」

神奈子「冗談、冗談」

早苗「遅刻するじゃないですか？リヨリヨ？」

リヨリヨ「わっ?!ほんとだ！今から行きます！では！行つてきます！」

神奈子、早苗、流星「いつてらっしやい！」

諏訪子「あつ！ちよつと待つてよ！」

そして、なんとか寺子屋に着いたリヨリヨ達

リヨリヨ「チルノちゃん…お、おはよう」

チルノ「あ、リヨリヨ…おはよう…」

恥ずかしそうに…まあそうですね。

大ちゃん「あれ？二人ともどうかしたの？」

チルノ、リヨリヨ「な、なんでもない！あつ！」

大ちゃん「声も揃えちゃって…クスクス」

めいりん「はい、席についてください！突然ですが今日は新しいクラスの発表です」

みんな、ザワア…ザワア…とどっかのカ○ジのように騒ぎ始めた

めいりん「はい、はい静かにーそうゆう事なのでみんな仲良くねー」

そんなこんなで昼休みの事

リグル「みんなで運動場で遊ぼうよー」

リヨリヨ「いいね！やろう！」

ルーミア「いいなのだー！」

そして、遊んでたら…

???「そこを退いてくれるかしら？」

リヨリヨ「えーと…誰…かな？」

レミリア「ふふふ…私はレミリア・スカーレットよ…カリスマ組の生徒よ」

リグル「カリスマ組だって！ハハハっ！」

レミリア「そこ！笑うんじゃないわよ！リヨリヨも笑いこらえない！」

リヨリヨ「?!なんで僕の名前を…」

レミリア「リヨリヨは…恩人だったから…でも、その運動場は私が今来たから私の物

なのどきなさい」

リヨリヨ「え、ええ…なら一緒に遊ばない？」

レミア「嫌よ、私はお嬢様だから」

リヨリヨ「そんな事言わないで、ねっ？やろうよ」

レミア「あなたがどうしてもというならね…」

そして、レミアも含め後からこいしやさとりとかいう子などたくさんの子が来てみんなで遊んで、みんな帰ってた：

そのお嬢様はまあまあだと言っていた

それよりずっと傘差しながら遊んでたよねあのレミアちゃん…なんでだろ？

リグル「よくレミアちゃん誘えたね」

リヨリヨ「みんなと仲良く遊びたかったからね…」

リグル「そっか…リヨリヨらしいね」

ルーミア「そーなのだー」

リヨリヨ「そ、そうなのかな…？」

ーその頃、魔理沙達はー

リリハ「お、お待ちください！キリハさん！（世間はさー冷たいわねえ…）」

キリハ「そこを一步でも動いてみる…こっばみじんに消し飛ばすわよ？」

魔理沙「まあまあちよつとは聞いてやろうぜ？」

そして魔理沙がキリハに近づいて耳元で

魔理沙「続きは…またできるだろ？」

キリハ「っ?!…／／」

キリハ「ごほん、ごほん…いいわ魔理沙さんがそう言ってるならいいでしょう」

リリハ「その言葉を聞いて感無量です…と思ってるあなた？キラーン」

キリハ「やっぱりやってしまったほうが…」

リリハ「まってまって！冗談冗談！本当の事言うから！実は私はもう一人のあなたなの！」

キリハ「はえ？」

第4話ー完ー

さとり「これ読むの？なんで私が？出番少ないから増やしてあげようと思ったの？あなたの考えることはお見通しなのよ？まあいいわ、次回予告！謎の人物！さーてこの次もサービスサービス！ってサービスサービスってところいるのかしら？」

謎の人物

リヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

第4話 謎の人物

く 魔理沙の魔法店く

キリハ 「一体どうゆう事なの？よくわからないのだけれど？」

リリハ 「つまり、もう一つの世界のあなたデスっ！」

キリハ 「もう一つの世界の私？」

魔理沙 「おいおい、まてまてここは幻想郷だぞ？勝手に入れないようにはなっているはずだが？」

リリハ 「私の世界ではなんでもありなのです！私は新世界のあなたデイス！」

と、すると魔理沙さんが私の肩をトントンと叩き手招きしていた

キリハ 「どうしたんですか？魔理沙さん？」

魔理沙 「どうも、信じられないんだぜ…異世界から来るなんてな…」

キリハ 「確かに…考えにくいですね…」

魔理沙 「どうする？」

キリハ 「どうしましょう？…」

リリハ 「ごほん…ごほん…ここそ話してどうしたんですか？」

魔理沙 「あ、いやーなんでもないんだ？それよりだ…あんたは何しにここに来たんだ？」

リリハ 「ふふーん…よくぞ聞いてくれました！ズバリ！あなた！」

キリハ 「あ、私？」

リリハ 「そう！そのキョトンとしてるあなた！キリハさん！あなたの監視です！」

キリハ 「へ？」

魔理沙 「え？」

キリハ 「なんでわざわざ異世界から来て？」

リリハ 「それはですね…興味があつたから？テヘツ？」

キリハ 「テヘツ？じゃないわよ！興味があつた？あんたのせいでムードぶち壊しにされたのに！そんなけの理由で…」

魔理沙 「まあまあ…まあ怪しいやつじゃなさそうだからいいとするか…」

リリハ 「ふふふ…よろしくお願いしますね」

と、なんやかんやでリリハの件はなんとか一件落着らしい…？

その頃、洩矢神社では：

リヨリヨ「あ、みなさんおはようございます！みなさんの朝ごはん作ってきますね」

諏訪子「あーありがとう！リヨリヨ」

神奈子「偉いなーリヨリヨ！」

そして：リヨリヨが朝ごはんの支度している間の出来事：

早苗「もう春ですねえ：桜に埋もれたいですね：」

神奈子「なんでそうゆう発想になる！」

早苗「えーでもやってみたいから：」

諏訪子「それで前も変な目にあつたから私いやだよ？」

流星「ぼ、僕も：」

早苗「でもやってみたいから：桜よ散れええ」

神奈子「ちよつ：早：ギヤアアア」

リヨリヨ「うーん：みなさん朝ご：ふぎやつ！」

諏訪子「ちよつと早：わっ！」

流星「わっ?!ちよつ：あつ！」

部屋の中は桜に埋め尽くされてしまった：

するとそこには懐かしい人が来ていた：

「あらあら…なんてこと…」

「本当ですよ…ふふふ」

諏訪子「ぶっはっ!?! あっ! あなたは!」

フラン「えーこれ私が読むの? めんどくさいよー…ぷーう…えーと…次回予告、異変
!・さーてこの次もサービスしちゃうよっ! もう! 恥ずいんだけどっ!!」

異変

とあるリヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

第5話 異変

リヨリヨ「いてて…あなた方は？」

文華「初めてだった？私はリヨリヨの…まあともかく文華よ…うふふかわいいわね」
リヨリヨ「そんな…かわいいだなんて…」

すると諏訪子がわざとらしく咳をしたとたん
文華はピタリとリヨリヨをいじるのをやめた

紫「うふふ、私は八雲紫よ…隙間妖怪よ」

文華「いえただのBB…ではなく綺麗なお姉さんです！私の尊敬する師匠です！」

諏訪子「全くあなた達も変わらないわね」

諏訪子は嬉しそうに笑っていた

正直言う可愛かった

早苗「でも…どうしたんですか？文華さん、紫さん？」

紫「…ちよつとね。」

なにやら深刻そうな顔をしていた

リヨリヨ「…?」

神奈子「すまない、リヨリヨお買い物していつてくれないか?お酒が切れたんでな」

リヨリヨ「もう…飲み過ぎないように…分かりました行つてきますね」

神奈子「ああ…悪いな…」

急に空気が重くなつた…そんな気がした

流星「それで…要件は?」

分華「実はですね…あの子…リヨリヨはあの事件によつて親は亡くなつたと思つてい

ましたですが…親子さんは生きています」

諏訪子「なんですつて?!今どこに居るの?!」

分華「はい…何者かに誘拐されているそうです…本名も母親ならわかつています有栖

川 雅…幻想郷で団子屋を営んでいたそうです」

早苗「でも…何のために…誘拐したのでしょう…」

紫「そうなの…今それを調べている所よ

後、最近黒い騎士のような者が急に現れ、村を荒らし、去つていくという異変が多く

起きているらしわ、関係があるかもしれないから気をつけね」

諏訪子「わかったわ、ありがとう紫、文華」

紫「いいわよ…リヨリヨへの恩返しよ」

文華「その通りです！私は今でもリヨリヨの事を思っていますから…」

諏訪子「そっか…（リヨリヨ…）」

分華「では！私達はこれで！」

神奈子「ああ…ありがとうな」

早苗「気をつけてくださいいねー！」

流星「でも…何の為…」

諏訪子「うん…（リヨリヨ…リヨリヨあなたは本当に死んじやったの？…早く帰って

きてよ）」

く一方その頃リヨリヨはく

リヨリヨ「ふう…お酒買えたー」

???「……。」

リヨリヨの目の前には黒騎士がいた

馬も黒…

リヨリヨ（見かけないな…）あのーどいてくれませんか？」

???「洩矢諏訪子はどこだ？」

リヨリヨ「…?!なんであなたに言わないといけないんですか!あなたは誰です!」
レオコーン「私は黒騎士レオコーン…お前を殺し、洩矢諏訪子の居場所を突き止める
者の名だ!」

リヨリヨ「わっ?!」

次回予告

パチュリー「(本を読みながら)…次回…黒騎士。」

黒騎士

「タイトルロゴだドウウン！」

とあるリヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

第6話

黒騎士

リヨリヨ「わああっ！」

とつさに手を出したすると…

なんと、ツタのようなくねくねした物がリヨリヨを包み込んでいた

レオコーン「なっ…やるなっ！しかしっ！」

黒騎士はいとも簡単にその守りを破り突撃してきた

その…刹那

キリハ「そこまでよ！」

気弾が飛ぶ

レオコーン「ぐふっ…くっ誰だっ！」

キリハ「私はキリハよっ！覚えておきなさい！」

リヨリヨ「き、キリハさん！」

キリハ「リヨリヨ?!怪我不い?」

キリハ姉さん…まだ救われた後よく遊んでくれたな…おつと…そんなことよりっ！

リヨリヨ「キリハさん後ろっつ！」

キリハ「はっ?!しまった?!」

レオコーン「貴様もみちずれだああ！」

リリハ「そうはさせない！スperl月虹鉄壁っ！」

光に満ちたガラスのような壁がリヨリヨ達を包む

レオコーン「なっ?!」

リヨリヨ「えっ?!キリハ姉さんが?!ふ、二人…?!」

キリハ「ちよっ?!勝手について来んな！あんたどこまでストーカーするのよ！魔理沙

さんに頼まれた買い物行くだけなの！」

リリハ「何度も言わせないでください！あなたは異世界の私なんですよーもう」

キリハ「そもそも…あなたどんなけ私とくっついてるのよ！」

リリハ「それは…」

リヨリヨ「2人ともっ！話は後ですっ！黒騎士がっ！」

レオコーン「おのれつつよくもおつつ！」

黒いオーラのような物が感じれた…

とてつも強大な…

レオコーン「私を本気にさせたなっ！」

リリハ「おつと本気で来ましたか？なら、私も本気モードでいかせてもらいますよっ
！」

リリハ？とかいうキリハ姉さんのそっくりさんが周りに無数の光の玉のような物が
浮かび上がる

それは百…千…いや数え切れない程

リヨリヨ「な、なんなんですかつあぁ?!」

リリハ「ふふっこれが私の本気モードですよその名も！「スペル断空砲っ！」、まあま
だまだ序の口の方の」

と、にっこり笑う…

何者…

レオコーン「その程度っ！ゆくぞっ！はああっ！」

大地が揺れ、裂け始めたそして予先はリリハの元へ一直線だった

キリハ「危ないっ！」

リリハ「今だっ！断空砲一斉発射っ！」

レオコーン「なっ?!ぐはっ!くっ!」

煙が舞った…やった…誰もが思ったしかしっ!

レオコーン「なかなかのものだった…少女よ…だが…まだ詰めが甘いようだ」

リリハ「なっ…あの「断空砲」をくらって生き残ってるやつがいるなんて…」

レオコーン「ふっ…リリハとかいう者名は覚えておこう…今回はひとまずおわすけだ、私の名は黒騎士レオコーン、洩矢諏訪子を倒す者だ…さらばだっ!」

ダメージを思った以上にくらったのだろう

追おうと思ったが、リリハさんのあの魔法のような物は消費が多いらしく体の負担が大きくなりその場に崩れ落ちたので、追うことはできなかった

その黒騎士のオーラはなぜかどこかであった気がする…なぜだかは分からない…すると…遠くから紫さん、文華さんがやってきた

紫「リヨリヨちゃんっ!」

文華「大丈夫?!リヨリヨ!怪我ないっ?!」

リヨリヨ「な、なんとか…」

紫「よかった…本当によかった…」

文華「ううう!リヨリヨ!もう!」

抱きしめられたとつても恥ずかしい…頭がパアアン！となりそうだった…

紫「ところで…キリハ…あなた双子いたの？」

キリハ「違うは…異世界から来た私らしいわ…」

紫&文華&リヨリヨ「ええっ?!」

次回予告？

作者「リヨリヨは洩矢諏訪子を守るべく修行する…試される根性と勇気…そして、MMDの作り方を覚えた作者（本編に関係ありませんw）、単発でゲームを作っている作者果たして、無事作者はMMD、ゲームを作りあげる事が出来るのかっ！次回、修行の日々さーて！次回もサービスサービスっ！」

修行の日々

前回までのあらすじ

突如、黒騎士レオコーンとなる者が現れ

リヨリヨは驚きとどまってしまった…しかし、キリハ、リリハに助けられた

そして、リリハの正体はなんと別世界のキリハだった！

とあるリヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

第7話 修行の日々

リヨリヨ「…でもなんでここに？」

リリハ「それはですねえー」

少女説明中

リリハ「という事なんですよ〜」

分華「はあ…なんで暇つぶしだけと言う理由で来たのは分かりませんがねえ…」

紫「まあ…これからもよろしい頼むわ（でもいくら科学力かなんだか知らないけど…

幻想郷に勝手に入ってこれるなんてね…信じがたいわ…。）」

リヨリヨ「…くっ。」

キリハ「どうしたの？リヨリヨ？」

リヨリヨ「僕…結局なにもできませんでした…あの一瞬だけでた能力…僕使えるように努力したいです！」

キリハ「リヨリヨ…」

文華「分かったわ…あなたがそこまでいうなら私達と修行しましょう」

リヨリヨ「本当ですかっ!？」

紫「ええでも、厳しいわよおー？それでもいいかしら？」

リヨリヨ「はい！紫さんみたいな綺麗なお姉さんに教えてもらえるなら！」

紫「あらもう…リヨリヨったらどっかの誰かさんとは違って偉い子ねえー」

どっかの誰かという部分だけを強調してリヨリヨに抱きついた

文華「…はあ…でも、諏訪子様は許していただけでしょうか？」

リヨリヨ「…これは僕がなんとかします！」

紫「それだけ強くなりたいのね…ふふふ、分かったわ…ついてってあげるから頑張っ
ていうのよ」

リヨリヨ「はいっ！」

少年達移動中…

着いてみると、みんなが心配していたのだろうかみんなリヨリヨを迎えていた

諏訪子「リヨリヨ！どうしてこんなに遅いの…？ってあれ…」

リヨリヨ「お母さん実は…」

少年説明中

諏訪子「そうだったの…怪我はないみたいで良かったけど…ダメよ」

リヨリヨ「どうして?!」

諏訪子「もう…失いたくないからよ…大切な人を」

その目は泣いていた

リヨリヨ「それでも…僕は諏訪子様達みんなを守るようなそんな人間になりたいんです！」

神奈子「たとえ…その試練が苦しくても…か？お前はまだ幼いそれでもやるのか？」

リヨリヨ「やってみせます…いいえ、やります！」

神奈子「…ふう…わかった、お前の意思がそんなに固いなら何を言っても無駄だろう、よし私も手伝う」

リヨリヨ「うえ?!」

諏訪子「ん…！私も手伝うよ！」

早苗「わ、私も！」

流星「ぼ、僕も！みんなと一緒にやりましょう？」

リヨリヨ「みんな……」

涙が出そうになった……

紫「うふふ……決まりね、じゃあ早速始めるわよ！」

こうしてリヨリヨの修行の日々が始まった

―そしてある日の事―

チルノ「リヨリヨー！」

リヨリヨ「はあ……はあ……ち、チルノちゃん?!」

チルノ「うふふ……こんな朝早くから頑張ってるの？」

リヨリヨ「うん、まあね。チルノちゃんを守るようにならないと……」

リヨリヨは微笑んだ

チルノ「ううう……ありがと……」

リヨリヨ「うん！でも今日はどうしたの？こんな朝早くから？」

チルノ「えつ?!じ、実はねあたい最強だから、リヨリヨのために朝早く起きてお弁当作っ

たの！良かったら食べようよ？」

リヨリヨ「僕のために……？ううう……ありがとうチルノちゃん！」

チルノ「もう！泣かないの！」

すると、あまり関心しないような目で見ている人物がいた

紫「ううん！リヨリヨ！」

リヨリヨ「わっ?!すみません…」

紫「はあ…今日は特別よ」

リヨリヨ「ありがとうございます！」

特別に今日はお弁当を食べていい事となった

チルノ「はい、リヨリヨあーん！」

リヨリヨ「あ、あーん…もぐもぐ」

チルノ「どう?おいしい?」

リヨリヨ「うん!とつても!」

チルノ「嬉しいな…もつと食べてよ!」

リヨリヨ「うん!」

少年達食事…

リヨリヨ「うーん…美味しかった!」

チルノ「リヨリヨ、こつち向いて」

リヨリヨ「ん?」

するといきなりキスをしてきた

チルノ「その…これでくじけないで頑張つてね…」

リヨリヨ「テ s # & | # ○ ↓ < : × + ?!

チルノ「じ、じゃあね！頑張つて！」

リヨリヨ「…うん、また…」

一瞬の沈黙の後…

リヨリヨ「うわあああああ！ぬおおお！やってやるぞおお！」

この世のリヨリヨとは思えないとてつもい力をみせたという…

諏訪子「…はあ。」

そして、一ヶ月時が過ぎた…リヨリヨは！

―第8話に続く―

イナバ「な、なんで私なんですか？この話の中で一回も出たことないのに？ま、まあいいでしょう次回予告！仮面の中に宿る者！さーて次回予告も！サービス、サービス！」

てゐ「イナバが服を脱いじゃいます！」

イナバ「しませんっ！」

仮面の中に宿る者

とあるリヨリヨの奇妙な冒険

―第8話―

仮面の中に宿る者

あれから、もう一カ月がたった…変わった事？そりゃー能力ちやんと使えるようになりましたよっ！きつかったなー

そう！僕の能力は、自然を操れる程度の能力

これで…やつとみんなを守るのかな…

―???
???―

??? 「レオコーン…まだ倒せないのか？リヨリヨを？」

レオコーン 「あいつはまだまだだ…修行をしているらしいからな、そのくらいの時間を与えて殺した方が殺しがいがある」

??? 「ふ…まあ好きにすればいいわ、私の知ったこともないしね…全てはこの幻想郷の強者を無くすため」

レオコーン 「ああ…強者が居るからこんな異変が続くんだ…時はきたリヨリヨ殺す」

??? 「ふふふ…期待してるわ、リヨナサン・リヨースター」

レオコーン 「ふ…相変わらずだな…」

シユンという効果音とともに消えた

??? 「どう動くのかしら？ 幻想郷は？」

―寺子屋・午後12時ごろ―

リヨリヨ 「ごちそう様でした…いやーやつぱりお母さんのお弁当は美味しいですよ！」

諏訪子 「うふふ…ありがとうございますあ、ご飯が口についてる」

ひよいと口についているご飯を取ってくれた…それをじーと見ている…チルノちゃん

リヨリヨ 「ありがとうございます／＼／＼えへへ…つてげっ?!」

チルノ 「…ふんっ！」

と怒っているチルノちゃんを見る心配そうな大ちゃん

諏訪子 「あらあら…どうしたの…悔しいならチルノちゃんも作ればいいじゃない？」

チルノ 「うるさい！ ロリババ！」

諏訪子 「な、なんですって！」

言い合いが続くので…

リヨリヨ&大ちゃん「もう！二人とも！」

2人で説教しました

―寺子屋・午後3時―

めいりん「はい！今日の授業はここまで！では、みんな解散！」

一同「はい！」

リヨリヨ「ふうさてと…チルノちゃん？」

チルノ「ふん？何…？リヨリヨ…」

機嫌悪いな…

リヨリヨ「一緒に帰らない？」

チルノ「ふん！諏訪子ちゃんと帰ればー！」

リヨリヨ「…チルノちゃんと一緒に帰りたいんだ…」

するとチルノちゃんは…

チルノ「り、リヨリヨがそういうなら…いいよ…」

リヨリヨ「ありがとうチルノちゃん」

良かった…すると今度は…

諏訪子「リヨリヨっ！ううう…」

リヨリヨ「す、諏訪子様…」

諏訪子「もう知らないっ！」

リヨリヨ「あっ……」

結局、諏訪子様その後帰ってしまった……

それだけだと思っていた……

でも……こんなことあるなんて

いつも通りチルノちゃんと帰ってきたら、みんな慌てていた

リヨリヨ「皆さん、そんなに慌ててどうしたんですか？」

早苗「諏訪子様が帰ってこないんですっ……」

―第9話につづく―

椀「うーん……これ読むだけですか……なんだか恥ずかしいです……じ、次回！涙、空に落ちてじ、次回もサービス！サービス！（フリフリ）」

涙、空に落ちて

とあるリヨリヨの奇妙な冒険

―第9話―

涙、空に落ちて

僕は愕然とした…あんな事を言わなければ…一緒に帰っていれば…チルノちゃん
ばつかみて…周りが見えていなかった…

早苗「どうしましょう?! 諏訪子様が…ううっ」

流星「手がかりもないし…どうしましょう…」

すると、歩いてくる人影が見えた

キリハ「いや、ありますよ」

神奈子「どこにいる! そいつはどこにいやがるんだ!」

キリハ「まあ、落ち着いください! こんなものが届いたのです…何故かうちに…」

それは手紙らしき物だった

そこにはこんな事が書かれていた

洩矢諏訪子を返して欲しければ

洩矢リヨリヨ一人で来い

他の奴らが来れば洩矢諏訪子を処刑する

行動はすでに監視済みだから余計な事をすればすぐにでも処刑する

魔法の森にてまつ

と書かれてあつた

ガンツと鈍い音がした見ると神奈子様が地面に拳をぶつけていた

神奈子「くそつ…なんで私達がいけないんだよ！リヨリヨを危険な身にあつたら…私

は…私は…」

みんなが僕を悲しい目で見ると

早苗「修行をしたとしてもかなわないかもしれない…どうしますか？リヨリヨは？」

僕は答えに困つた

怖い気持ちで一杯だからだ

相手は自分を本気で殺そうとしている

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い…

でもっ！

リヨリヨ「僕が諏訪子様を助けます！」

流星「リヨリヨ?!君はまだ……つて言つても無駄かもしれないね、初めて自分で決断

した事だもんね行ってきて…でも…死なないで！」

泣きながら抱いてくれた

リヨリヨ「流星にいさん…」

早苗「私もですよ…約束です」

神奈子「死ぬんじやないよ…」

キリハ「生きて帰ってくるのを…待っているわね…」

みんながみんな僕を抱いてくれた

その一時を終えて

リヨリヨ「行ってきますっ！」

僕は走った、自分の罪をせよいそしてみんなのために諏訪子母さんのために

―魔法の森―

レオコーン「きたか…リヨリヨ！」

リヨリヨ「諏訪子様はどこだっ！早く返せっ！」

レオコーン「安心しろここだ」

すると諏訪子様は”カゴ”の中に居た

諏訪子「リヨリヨ！なんで来たの?!」

リヨリヨ「諏訪子様！それは…」

言い出そうとしたらレオコーンが割り込んできた

レオコーン「このかごは始めに言っておこう、私が負けた認めたと時解放される…決着をつけるための最高のかごだろ」

リヨリヨ「くっ…聞いて下さいい諏訪子様！僕は諏訪子愛しています！だから助けに来た！今助けます諏訪子様！」

諏訪子「だめっ！リヨリヨ危ない！」

リヨリヨ「えっ…」

振り向いた瞬間、槍のような物が腹部を貫通し、吹き飛んだ

レオコーン「ふはははは！残念だったな！んなんな無防備でくるからいけないのだよ」

諏訪子様は泣いていた…でもその顔も薄れてきた…でも、助けるこの身が滅びようとも…どうなつていい！だけど…

リヨリヨ「諏訪子様を…諏訪子様を返せっ!!!」

―第10話、完―

次回、覚醒そして…

覚醒そして…

とあるリヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

ー第10話ー

覚醒そして…

ゆっくりとした足取りで歩いていく

リヨリヨは立ち上がる…

全ては母さんのため、みんなのために

空がだんだん黒くなっている

リヨリヨ「僕がどうなってもいい！でも、諏訪子様だけは絶対助けるっ！」

リヨリヨの頭の中はー諏訪子様を助けるーただそれだけだった、その他は考えていな

い

しかし考えるうちに体にある異変が生じていた…それは体が獣化してた…一部だけ
ではあるが

でもそんな事は今のリヨリヨは知らない

レオコーン「っ…！なんだこの気迫は…リヨリヨとは思えないっ！」
リヨリヨ「ウオオオオオっ！」

リヨリヨは獣化した右手を突きだして突進した

レオコーン「全力でくるのならっ！ハアアアアッ！」

レオコーンも負けじと槍を全力で構えて突撃した

閃光の放ち幻想郷に一瞬光が灯されたようだった

リヨリヨ「……」

レオコーン「……クツ！」

パリーンと仮面が割れる音がしたゆっくりと倒れた

リヨリヨ「っ！お、かあ…さん…す、諏訪…子お…か…（バタツ）」

諏訪子の顔が泣きながら走ってくる姿がかすれていく…リヨリヨはゆっくりと目を

閉じた…

仮面の素顔を見ずに…その人がリヨリヨを異変から救った小さな英雄とも分からず

に

リヨリヨ「う…う…うん…」

曖昧な意識の中僕は目を開けた

すると見たことのない部屋にいた

シスタ「お、お目覚めですか？」

リヨリヨ「こ、ここは…」

シープ「おお！ やつと起きたか！ 3日ぐらい起きなかつたからさすがに心配したよ」

リヨリヨ「諏訪子様はっ！ 諏訪子はどうしたんですかっ！ うっグツ！」

シスタ「あ、あんまり動かないで下さい！ 傷口開いちゃいますっ！」

シープ「まあ、落ち着け大丈夫だ洩矢神社に戻ったよりリヨリヨが起きるまで離れな
いっ！ って言つてたけど無理やり連れて行かれたよなんか重大な事があるってさ。

えーと… 神奈子様… 早苗… だっけ？ あとキリハもな」

リヨリヨ「そうですね… 良かった…」

本当に良かったと思つた心の底から

リヨリヨ「でも、どうして俺はここに？」

シスタ「その… 諏訪子様が泣きながらあなたにしがみついていたから、出血も酷かつたから私が治療したんですよ…」

リヨリヨ「そうですね… ありがとうございます！」

シスタ「一樣異世界では、そうゆうのも母から教わりましたので」

リヨリヨ「異世界から来たんですか?!」

シスタ「ひやうっ！ は、はい！」

これ以上耐えられなかったのか恥じらいながらシープの背に隠れた

シープ「はあ…すまないねリヨリヨこの子男の子全然喋らないからさ」

リヨリヨはいえ、気にしてませんよと笑顔で言った

シープ「そうだ！異世界で伝えられてきた物を一眼みてお前なら使えると思ったんだ！」

リヨリヨ「なぜですか？」

シープ「今思った！」

リヨリヨ「は、ははは…」

シープ「これをお前授けようと思う」

それは剣だった

リヨリヨ「これは？」

シープ「これは聖剣リシス、ある女性がその剣に取り込まれたとかで一生剣の姿になつちまったとかいう話だ」

リヨリヨ「へー」

シープ「まあ使えば分かるよ、まあ休んだら母さんの所に行ってあげなよ」

リヨリヨ「はいっ！」

時は遡り、3日前

―洩矢神社―

無理やり連れてこられた諏訪子様まだ泣いていた

諏訪子「ううう…ひつく…」

早苗（諏訪子様…）

神奈子「すまないね…諏訪子実は諏訪子に見てもらいたい人がいる…」

流星「こちらです」

するとそこにはボロボロになった服を着た見覚えのある人物がたっていたデコに傷を負っていたが

諏訪子「リヨナサン…リヨースター…リヨリヨっ！」

―第10話 完―

次回予告

射命丸「さーて！次回のリヨリヨの奇妙な冒険はっ！ついにレオコーンを倒したリヨリヨ！さーはたしてどーなんるんでしょお！次回！リヨリヨ奇妙な冒険！もう一人のリヨリヨ！さーて！次回もサービス！サービスっ！」

もう1人のリヨリヨ

とあるリヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

第11話

もう一人のリヨリヨ

俺は何もかもが思い出せなかった、どんな罪を犯してきたかさっぱり分からない…でも、分かる事はある、自分が人を悲しませる事をしたという事を…

リヨナサン「……………っ。」

まどろみの中目を開けると

一人の口…いやいや…女の子が泣いて抱きつけてきてくれた俺はこの子を知っている、洩矢諏訪子…俺の恋人…忘れるわけがない…まだ本当の気持ちを言えていないまま行ってしまったから…そうあの日、幼い頃から首つけていた大切な赤い石を渡して…本当は言うつもりだった…だが何を言おうとしたのかが分からない…

リヨナサン「…す、わ、こ…様？」

諏訪子「そうだよお…諏訪子だよお…うええん…リヨリヨおお…」

俺は今気がついた本当に諏訪子様に悲しい思いをさせた事を…

諏訪子「なんでえ…なんでなよお…うぐつ…ぐすつ…」

すると、今思い出したが早苗さんが諏訪子の背中をさすっていた

神奈子「うぐつ…リヨリヨ…どうして私たちを殺そうとか…あんな優しいかったリヨ
リヨが…なんで…こんな事をしたんだ？教えてくれ…」

リヨナサン「…っ！…実は…」

そして、リヨリヨも重大な事を告げられていたそう、あれはリヨナサンが起きて一日
たった…

シスタ「リヨリヨさん！」

リヨリヨ「どうしたんですか？」

シスタ「あなたに隠していた事があるんです…」

シープ「おい！シスタ！それは…」

シスタ「おねえちゃん…これは…いずれ知っておかないといけないリヨリヨさんの現
実なの…」

シープ「………」

リヨリヨ「どうゆうことですか？」

シープ「あなたは…リヨリヨという名前の前に…名前があつたんですその名は…経時

夜・キンケドゥ：そうキンケドゥという名前なんです…」

経時夜・キンケドゥ

もともとリヨリヨの名前

両親は父は3年の事故で死亡

母は行方不明だったのだが…

シスタ「実はあなたには名前があつた事は前から知っていたんです…」

キンケドゥ「なんで…教えてくれなかつたのですか？」

シスタ「うっ…実は…」

???「シスタ…ありがとう後は私が説明するわ…」

その声のした方を向くとシープが棒状のものを持っていた

シープ「これはな…君にしか使えない特別な物なんだ…この棒は君のお母さんの魂で

作られている」

キンケドゥ「なんで…そんな事を？」

母「あなたをローズから守る為よ…あの異変はかつてリヨナサン・リヨースタという人が倒したはずなのだけど生命だけは生きてしまつてね、再生して幻想郷を自分の物にしようとしているのだから手始めに村を燃やした夫は助けられなかつたけど、せめてあなただけは守れたらと思つて昔、わたしの母から教わつた自分の生命を物質に変える呪

文を使ってあなたを守ったの…」

キンケドウ「そうだったんだ…」

シスタ「お母さんの名前は経時夜・香織」

香織「ごめんね…あなたにはこんな事に巻き込まない為にあなたを騙すような事して

…母親失格だわ…」

するとキンケドウは棒の母を抱きしめた

キンケドウ「そんな事ないです…母さん。正直に言ってくれてありがとうございます

…母さん会いたかった…」

キンケドウはその場で泣き崩れた

そして、泣き終えた頃

沙織「キンケドウよく聞いて、私は今あなた武器として一緒に戦うわ」

キンケドウ「いやです！なんで母さんを武器みたいに使わないといけないんですか

?!」

沙織「お願い…ローズを倒して…あなたのお父さんの仇をうちたいの…」

その声は涙声だった

キンケドウ「母さん…わかったよ…僕も一緒に戦う！」

沙織「見ないうちに大人になったのね…キンケドウ…」

初めて本当の母に褒められてはつきり言って嬉しかった…

沙織「今、私はあなたが思った物になんでもなれるの…あなたが自分を守ろうとすれば私は盾になったりするの」

キンケドウ「それでローズを倒そうと？」

沙織「流石ね…そうよやれる？」

キンケドウ「やります…やってみせるよ…母さん」

沙織「ありがとう…」

シープ「私も行くよ。キンケドウをほとけないしね」

シスタ「わ、私も！」

キンケドウ「よし！行こう…ローズの元へ…でも場所は？」

あつとみんな口をそろえた…

キンケドウがそんな事をしている時

リヨリオは…

リヨリオ「あの時、俺は異変を解決しようとしてと霊夢さんと一緒に解決しに行つたでしょう

どあつたから…」

そうあれは、遡る事三年前

霊夢「私はこのあたりに隠れてるこの異変のしたやつを探し出すわ。あんたは避難さ

せといて」

リヨリヨ「確信はあるんですか？」

霊夢「かんよ、かん！じゃ！よろしく！」

リヨリヨ「えー…まあそれを見事に当てるのが霊夢さんだもんな」

そして、俺は村の人みんなを避難させていた

だが、俺もかんだつたが霊夢さんも負けるような強いやつがやったと思った…だから
諏訪子様には肩身を渡した

そんな事を考えているうちに一人の小さな男の子が泣きながら立っているのを見つ
けた

男の子「うえーん…ひつく…おかあさん…お父さん！」

リヨリヨ「大丈夫？安心しろ見つけてみせるから！安全な所に待ってろ！」

男の子「ひつく…」

こくんとうなずき

リヨリヨはその場を後にした

リヨリヨ「くそっ！なんでこんな！」

するとドーン！という爆音が鳴った

すぐ近くだったので駆け寄るとそこには霊夢さんがやられていた

リヨリヨ「霊夢さん！」

霊夢「リヨ…リヨ…にげ…て…」

はつと振り返るの自分も吹き飛ばされた

そして吹き飛ばした本人はこっちに近ずいて

そしてこんな言葉が呪文のように言われた

「なんで、こんな事になるんだと思う？ 私は強者が居るからとおもっているよ…恐る事はないんだよ？ 友達になろう…リヨリヨ」

その女の子は笑みを向けて喋ってきた

その後の記憶はない…

リヨリヨ「…という事があつたんだ…。」

神奈子「…そうか…でも、あんたのやった事は許せないんだよ！ あんたはその救った子を殺そうとしたんだよ！」

リヨリヨ「…っ！ 本当にすまない…」

神奈子「そんな事ですむ…」

諏訪子「神奈子!! なんでそんな事言うの？ リヨリヨかってしたくてやったんじゃないの…どうしてみんなでそうやって攻めるの？」

早苗「諏訪子様…」

リヨリヨ「諏訪子様でも俺はそんな事言われても仕方がない事を…」
すると懐かしい優しい暖かな温もりを感じれてた

諏訪子「リヨリヨ…そんな事言わないで…生きてるだけでも私は嬉しいの…」

リヨリヨ「諏訪子様…ありがとう…」

そして俺はそれを優しく包んだ

「??？」

ローズ「…リヨリヨ裏切るのね…あなたは良き理解者だったと思ったのに…始めましょう絶望の組曲を…」

幻想郷に再び悪が迫っていた…

次回予告

絶望の始まり

絶望を越えて

とあるリヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

第12話 絶望を越えて

キンケドウが外に出たとたんに地響きが鳴り出した

シスタ「キヤツ!!」

シープ「シープ大丈夫?」

シスタ「う、うんありがとうお姉ちゃん」

すると今は亡き母がペンダントの形となり僕の首飾りとなったお母さんがしゃべり

でした

香織「何かがくるわ!」

と、叫んだ瞬間たちまち鉛色の空になり

たちまち魔物のような奴が沢山出てきた

魔物「クケケ…全てはローズ様のために!」

と言った瞬間シープに襲いかかったって来た

キンケドウ「ちっ！ヤメロオオオ！」

と叫んだ瞬間ペンダントが姿を変えてつららのような

鋭い姿へと変えた。それは、まっすぐ魔物に突き刺さり魔物は苦しみながら砂となつて消えていった

キンケドウ「大丈夫？シープちゃん」

シスタ「う、うんありがとうございます…」

と照れていた

それを不満そうに眺める姉、シープ…それを察したキンケドウはすぐさま気をつけの姿勢を取つてしまった

香織「うふふ…キンケドウたら」

キンケドウ「な、何を言つてるんですか?!そんなことよりほらっ！敵いっぱい増えます!!」

とあわてて指を指すキンケドウの報を見ると魔物がうじやうじやいた
シープ「こんなの私達で相手にできるの?!」

シスタ「やるしか…ないの？」

キンケドウ「仕方ないです…皆さんこれだけは言わせてください!!」

絶対に生きて！みんなで帰りましょう！

シープ達「うん！」

その頃、リヨリヨは…

リヨリヨ「これは…まさか…」

文華「おそらく、再びローズが動き出したのでしよう…」

リヨリヨ「文華?!」

よく見ると涙をたらしながら言っていた

紫「ふふ、久しぶりねリヨリヨこの子つたらリヨリヨが生きてたという事聞いたら涙浮かべてね…それでおもいつきり抱きつくのかと思っただけど、緊張してるのかしらー？
フフフツ」

文華「なっ?!紫様！」

紫「うふ冗談よ、冗談！」

文華「ううう…」

その唸っている文華の顔に惚れていた事は諏訪子様には言えないな

でも…かわいいな…

早苗「あれえー？リヨリヨさん目が変態見たいな目になってますよ？」

リヨリヨ「うっ！なっ?!早苗さん！やめてください！」

諏訪子「リヨリヨ…！」

リヨリヨ「わー！誤解だよ！と、ともかく今は緊急事態なんです！ほら！迫ってきてますし！変な魔物みたいなのがつ！」

諏訪子「ふんっ！この話はローズ倒してからじーくっりお話するからねっ！」
するとリヨリヨがボソツと耳もとで

リヨリヨ「本当は大好きだよ！」

と言われ、驚いてリヨリヨ顔見ると懐かしい昔の笑顔を見れた

諏訪子「もう：／／リヨリヨたら：」

そのラブラブなりヨリヨ達を羨ましそうに見つめる文華：

文華「くううう！諏訪子様まあアア！」

紫「あらら？そんな事やってる場合かしら？敵さんがここに押し寄せてくるわよ」

指を指す方に目をやると魔物大軍が押し寄せていた

流星「ふう：：こうなったら：：本気でやるしかねえなあ：」

加奈子「あれ？流星？あなたそんなキャラだったかしら？」

と焦りながら聞くと

流星「あーすいません加奈子様、本気出るとね：：さっ！行きましょう！加奈子様！」

加奈子「お、おう：」

ついにリヨリヨ達の因縁を断ちきる全面对戦が始まった

「???」

大ちゃん「リヨリヨ…いや、今はキンケドウね…」

久々に友の声を言ったように思えてたでも今は違う…あいつは私からチルノちゃんを奪った本人なのだから

大ちゃん「キンケドウ…あなたさえいなければこんな事にはならなかったっ！」

今、復讐を誓った大ちゃんが動き出した…

次回、愛

愛

リヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

第13話 愛

その頃、キンケドウは…

魔物の大軍を倒しつつ、姉妹達を守りながらローズの元へ森を抜けながら向かっていった彼女らは記憶を封印し、解放する能力を持っているがまだまだ幼い姉妹だ…（キンケドウも同じぐらいの年頃だが）

キンケドウ「ふう…なんとか終わりましたね…」

香織「まだくる…!」

キンケドウ「えっ!どこから…」

すると魔物が姉妹達を狙ってしげみから襲って来たのだ

シスタ「ひっ?!」

シープ「きやっ!」

キンケドウ「っ!!」

この時キンケドウは思った一瞬だけでいい！この世界の中で誰よりも…誰よりも早く！動いてくれっ！と自分の心の中で念じたすると、足が軽くなった感じがしたと思えばシープ達の前に仁王立ちするような形になった

キンケドウ「やあああ！」

魔物に物理的な攻撃を与え、魔物が倒れそして消えた

キンケドウ「大丈夫ですか？二人とも」

シスタ「はい…」

シープ「あ、ありがとう…」

二人とも驚いていたそれもそうだあんなに体が早く動くわけがない自分でも驚いていた

キンケドウ「これは一体…」

香織「言ったでしょう？あなたが思ったら私は形を変えてあなたに力を与えると」

キンケドウ「これが…母さんの力…ありがとう母さん…」

と、いないはずのペンダント型の母に礼をする

香織「礼は後！まずはこの森を抜けてローズを倒すのよ！」

キンケドウ「はい！」

そしてキンケドウは、魔物を倒していき森を抜けた

キンケドウ「ローズ：あなただけは…」

ローズのいる元へ行こうとした瞬間

大ちゃん「行かせないわ」

キンケドウ「だ、大ちゃん?!」

シープ「邪魔するなよ！私たちは急がないと！」

大ちゃん「あなたは黙ってなさい：リヨリヨ：いや、キンケドウ：あなたさえ！あなたさえいなければ！チルノちゃんわっ！」

いつも大ちゃんじゃないと思った：

キンケドウ「大ちゃん！どうしちゃったのっ！」

大ちゃん「私にしゃべりかけないで！あなたの声なんて！聞きたくないわっ！さようなら！キンケドウウウ！」

???「待って!!」

キンケドウ「っ?!な、何で君が！」

キンケドウ「どうして君がいるの!?!」

なぜそんな事を言ったか、それはキンケドウの好きなチルノちゃんが目の前に居たからだ

チルノ「私ずっと知ってたんだから…あなたが頑張ってる事も全部知ってるのだから…」

大ちゃん「チルノちゃんもまたその男といちやついて！そんな事を言うためにわざわざここまで来たの！」

チルノ「違うわ！そんなのはついでもたいな事！私はあなたを止めに来たの！」

大ちゃん「(っ…頭が…) 邪魔するなら！」

キンケドウ「やめてっ！」

その時キンケドウは大ちゃんの異変に気がついた

何かおかしいと、いつもの大ちゃんじゃないと…

そして、大ちゃんの弾幕をなんとか結界で守ることができた

キンケドウ「一体どうしたって言うですか…こんなのいつも…大ちゃんじゃない…」

大ちゃん「あなたが私の大切な…チルノちゃんを取るからっ！」

チルノ「それは違うよ！大ちゃん！キンケドウの事も大好きだけど…大ちゃんも大好きなの、私の大切な親友だよ」

大ちゃん「くっ…うるさい！」

チルノ「大ちゃんはいつも私の事を助けてくれていつも優しくしてくれて…それがうれしくて」

大ちゃん「チルノ…ちゃん」

キンケドウ「正気に戻った…かな」

キンケドウはいつもの大ちゃんに戻ったと思った

その時だった

大ちゃん「うっ…っ！いやっ！やめてっ…！」

大ちゃんの手から剣のようなが現れたそれは禍禍しい闇に染まっていた

だが、自分の意識ではなく何かには操られているような感じがしたそして、そのまま大

ちゃんはチルノちゃんを襲った

大ちゃん「いやっ！やめてええ！」

キンケドウ「うおおっ！」

グサツと生々しい音が響いた

チルノ「キンケドウ?!」

腹の部分触ると血が手についた

キンケドウ「ごめんね…大ちゃん…チルノちゃん…疲れたよ…」

ぱたりとたおれこんだ

チルノ「いやっ！死なないで！」

大ちゃん「キンケドウ！キンケドウ！」

と呼び掛けいたらスゥスゥと寝息が聞こえた刺されたというのに寝てしまったのである

チルノ「もう…驚かせないでよ」

大ちゃん「ぐすんっ…バカ…」

大ちゃんも正気を戻し操られていた呪いも解けていた

森にはキンケドウの寝息だけが響いた

次回予告

リヨリヨの因縁…その元凶はまだ残っていた…この冒険の果てには何が残るのか
最終回 冒険の終わり

冒険の終わり

リヨリヨの奇妙な冒険

シーズン痛

最終回 冒険の果て

流星「くっ！キリがない！このまま押し負けてしまう…」

裏・流星？「お前の力はそんなもんなのかよ？ええっ！」

流星「うるさいなあ！こっちかかって…くっ！やってんだから！」

早苗「ひとりで何言ってるんですか？」

流星「あっ！いや！その！あはは…って早苗さん後ろ！」

早苗が振り返った時にはもう、すぐにでも襲われそうだった

早苗「えっ？ひやっ！」

すると、一本の光の筋が魔物を貫いた

早苗「リヨリヨさんありがとうございます！」

リヨリヨ「いえいえ、役にたててよかった、くっ…でもこのままじゃ人里までめっちゃくちやなってしまう！あの鈍くひかっている所がすごく怪しいと思うんだけどなあ…」

「

まりさ「そんな事は私におまかせだぜ！マスターっ！スパーク！」
放った瞬間一瞬にして一筋の道ができたかのように魔物が消しきった

まりさ「行きな！リヨリヨ！」

リヨリヨ「ありがとうございます！」

キリナ「まりささん…格好いいです」

まりさ「はは…照れるぜ」

キリナ「よーし私も！」

まりさ「おいちよっ！キリナどこ行くんだよー！つたく…」

キリナ「よーし！私は狙い打つのが苦手ですてね…こんな団体戦をまっっていました！
圧倒させてもらいます！乱れ打ちますっ！！」

無数の弾丸のように細かな光が魔物をことごとく粉々にしていく

まりさ「はあやれやれ…まっ結構数も減ってきたし…少しは楽になったぜでも流石に
これ以上はきついぜ」

加奈子「同感だいくら私でもこんだけの相手は久々で流石にきつい」

諏訪子「でも、リヨリヨがあそこにたどり着くまでは私頑張るよ！」

早苗「そうですね！」

リヨリヨ「みなさんありがとうございます！リヨリヨ行ってきますね！必ず帰ってくる何があつてもあなたの元へ」

諏訪子「うん…絶対だからね！」

加奈子「絶対帰ってくるだよ」

リヨリヨ「はいっ」

息を一息吐いて、気合いをこめてリヨリヨは言った

リヨリヨ「行きますっ！」

リヨリヨは走る勢いよく

彼の脳裏にはたくさんの思いが駆け巡っていた

リヨリヨは心で誓った必ず決着をつけると

涼「リヨリヨ何か来るっ！」

リヨリヨ「えっ?!っ！」

いきなり鋭い殺意を感じたそう、見かけに惑わされた事もあった今も惑わ…：…された一瞬！一瞬だから！セーフ！そんな事はどうでもいい！でもその好みの女の子は見かけで判断してはいけない悪魔だ

ローズ「久しぶりだね！リヨリヨっ！」

リヨリヨ「君からお出迎えだなんて珍しいじゃないか」

と苦笑しながら言った

ローズ「ふふっだっって遅いんだもん」

リヨリヨ「遅くなったよ色々面倒してくれたおかげでね」

ローズ「ぷぷ、やっぱり面白いっ！リヨリヨはだからもつと殺したくなっちゃう！」

リヨリヨ「残念ながらその気はないよっ！」

ローズ「ふふっあははっ！倭やっぱり面白いよりヨリヨは！じっくりいたぶってあげるね」

涼「リヨリヨ避けてっ」

リヨリヨ「なっ！うっ！」

鋭い痛みが走る見ると腕に刃物のような刺さっていた

リヨリヨ「くっ…」

ローズ「あははっ！もつといくよっ！」

すると、ローズは一瞬にして上空にういて刃物のようなものを投げてきた

無数の鋭利が体を突き刺さる、避けてた物もあるがあまりの数の多さに避けきれない物が腕、腹、脚に突き刺さるじわじわとリヨリヨの体を蝕んでいく

リヨリヨ「くっ…あっ…」

リヨリヨは意識を失いゆっくりと倒れた

ローズ「あれー？もう終わり？ならもう死んじやうしかないなね楽しかったよーうふふ
…あははっ！」

リヨリヨ「ここは…」

地面を見ると緑が広がっていた

リヨリヨ「なんか暖かいな…なんだろうあれ」

楽しそうな声が聞こえてくる

リヨリヨ「もう死んじやったのかな…ははっ二回目だな」

涼「あなたはまだ死んでない！」

リヨリヨ「ねえさん…」

涼「あなたはまだ生きている！生きているのよ！」

リヨリヨ「でも俺はもう…」

と眩いた瞬間ほに強い衝撃がはしった

涼「あなたたつて人は！あなたはまだ死んでないのよ！そして、あなたが死ねばあなたの大切な人も失う事になるのよ！」

リヨリヨ「大切な人…」

脳裏には諏訪子様や守矢のみんなやたくさんのお会ってきた人たちが浮かびあがった。でも一番大切な人は、諏訪子様だそうだ、俺はちゃんと伝えてない自分の気持ちを

訪子様はちやんと言ってくれた約束もしたんだっ

リヨリヨ「そうだ！俺は生きているんだっ！」

ローズ「これで終わりっ！」

鋭利で突き刺して後は食べようと思ったただがその考えはくつがえされた

リヨリヨは片手で鋭利を受け止めた

ローズ「嘘っ！あり得ないっ！確かに死んだと思ったのにつ！」

リヨリヨ「悪いね：俺はここで死ぬわけにはいかねえんだ」

と言つて鋭利を払いのけた

リヨリヨ「はあ：はあ：ありがどうねえさん：俺はまだ伝えないといけないんだ！人

生で一番の覚悟をつ！思いを伝えてない！こんな所で死ぬるかあっ！」

拳が光る覚悟とともに

リヨリヨ「この一撃に全てを掛けるっ！」

ローズ「っ！このおっ！」

リヨリヨ「うおおおっ！貫けえ！」

リヨリヨの気合いを込めた一撃がローズを貫いた

ローズ「なんでっ！いつもっ：うっぐっあああああ！」

ローズは完全に消し去った

リヨリヨ「はあはあ…やったよ…諏訪子様これで帰ってこれ…」
リヨリヨは静かに倒れた

一筋の光とともに魔物が消えていく空も晴れいつもどりの姿へと変わった
まりさ「ふう…なんかよくわからんが終わったぜ」

加奈子「ふう…」

騒ぎが収まったがまだ本当に収まった訳ではない

諏訪子「リヨリヨっ！リヨリヨはっ！」

早苗「行きましょう！リヨリヨの元へ」

諏訪子は勢いよくかけた抜けた空をそして急いだリヨリヨの元へそこには荒れ果てた大地とリヨリヨが倒れていたボロボロになつて

諏訪子「リヨリヨっ！いやっ！なんでまたっ！」

リヨリヨ「諏訪子様…俺は今回は死んでないですよ…」

諏訪子「リヨリヨっ！良かった…」

涙を浮かべて喜んだ

リヨリヨ「…諏訪子様…今から言うことは覚悟を決めて言うことですよく聞いてください」

諏訪子「な、何？」

一息入れてリヨリヨは静かに言った

リヨリヨ「俺は諏訪子様が大好きでは足りないほど好きです」

と言ったとたん諏訪子様は驚いてた

リヨリヨ「これからも良ければ俺といや、リヨリヨとずっと居てくれますか？」

凄く恥ずかしかった死ぬかと思うほどでもこれは俺の覚悟だ

すると優しくまだ涙がおさまってないのに

諏訪子「はい…」

と笑顔で言った

リヨリヨの奇妙な冒険―完―

ご意見ございましたらコメントしていただけてるとありがたいです